ダルを下げているのを見て、「私も欲しい」と思った純粋な気持ちがよみがえってきたんです。不安な思いが変わらず、魔物が棲んだままで試合をしていたら、金メダルは取れなかったかもしれません。最後は自分がどう変わるか、本当に気持ちは大切だなと、あらためて感じました。そして、あの最高の舞台で、最高の笑顔で自分の父を肩車できたことは、これ以上ない喜びでした。

継続の先に必ず成長がある

よくいろいろな方から、「頑張ってね」「期待しています」と声をかけていただきます。それがプレッシャーになる人もいるかもしれませんが、私の場合は、みなさんに元気と勇気と感動を与えられるように頑張るぞと発奮できるので、どんどん言っていただいた方がうれしいですね。こうした気持ちになるためには、本番で必ず実力が発揮できるという自信が必要です。そして、自信を持つには、日頃の練習を繰り返すしかありません。勉強でも、どの問題が出ても完璧だというぐらいまでやれば自信がつくのと同じです。子供の頃、2時間の練習のうち1時間半かけて、私はタックル練習をしていました。もう十分というほど、自然に体が動くまで体に覚えさせる、染みこませるまで徹底したことが、自信になったと思います。

また、今しかできないこと、今できることに全力で取り組むのが、私は大好きなんですね。もちろん、厳しいトレーニングもありますが、そんなときこそ楽しく、明るく、声を出してみんなを盛り上げます。道場にも「トレーニングは、楽しく、笑顔で」と書いてあるんですが、それを見ると「辛くても頑張ろう、強くなるためにやっているんだ」という気持ちになる。やはり、誰かにやらされるのではなく、自分で考えて何かをやるという姿勢が大事なのではないでしょうか。そんな風に思えるようになったのは、大学に入ってからです。私は高校まで親元にいて何もかも甘えていたので、入学して半年程は本当に苦労しました。寮生活になり、今までやったこともない身のまわりの事を自分でやらなければいけない状況に、もう辞めたいと思ったことも。でも、先輩に教えてもらううちに、これからは自分のことは自分で考えて何でもやらなければいけないんだと痛感し、食事に気をつけたり、自分で考えて練習したりして、勝てなかった選手にも勝てるようになってきたんです。やはり、何事も継続することが大切なんですね。たとえば、今から腕立て伏せを100回やれと急に言われても、これまでやってない人は無理でしょう。でも、毎日、回数を積み重ねていけば、いつかできるようになります。みなさんも、何かに少しずつでいいのでチャレンジすると、1日ではわからないですが、1年365日積み重ねていったら、きっと変化がわかりますよ。同じことでも、全力でやっていたか、普通にやっていたかで差が出てきます。ぜひ、全力で頑張るという気持ちで、何か好きなことに挑んでいただきたいと思います。

会場となった三翠ホールには、当日、1年生を中心に約1,500名の学生がつめかける盛況ぶり。内田学長から「吉田選手のお話を聞いて、本学の教育目標である“感じる力”“考える力”“コミュニケーション力”“生きる力”の涵養に役立ててほしい」と挨拶があり、講演会は始まりました。途中、会場にいらっしゃった吉田選手のお母様にもご家庭の教育方針などについてお話をうかがったほか、質疑応答コーナーでは学生からの質問も。吉田選手の当意即妙の切り返しで会場が爆笑に包まれるなど、和やかな雰囲気の中、講演会は幕を閉じました。

◎特集❷／対談

地域への新たな貢献を目指して

地域圏大学として、教育・研究を通じた地域貢献を目指す三重大学。
幅広い分野で、行政や産業界とともに活動を展開しています。
今回は、本学の卒業生である長島観光開発株式会社の稲葉邦成社長を、学内スタジオにお招きし、
学生時代の思い出や、地域と観光の関係、企業に求められる人財像などについて、
学長と語り合っていただきました。

長島観光開発株式会社
代表取締役社長
稲葉邦成

学長
内田淳正

◎司会・進行
児玉克哉 こだまかつや
副学長（広報担当）
専門分野は地域社会学、
市民社会論、NGO論、国際平和論

※1 三重大学地域戦略センター
地域の課題解決を担う大学発の地域シンクタンクとして、2011年4月に設置。県内の地方自治体に対する総合的な政策提言や地域産業活性化のための企画提案などを行っている。

※2 おかげ参り
江戸時代に起きた神宮への集団参詣。60年周期で数百万人規模の人々が神宮を訪れた。

50年にわたる挑戦で観光産業の旗手へ

司会　本日はお越しいただきありがとうございます。今年、三重県は神宮の式年遷宮により、観光業を中心におおいに活気づいております。そこで、本日は地域の観光業を牽引する長島観光開発株式会社の稲葉社長に、地域貢献のあり方や人財育成についてお話をうかがいたいと思います。まずは今年、創立50周年を迎える御社の歩みについてご紹介いただけますか。

稲葉　私どもの会社は、1963年に掘り当てた1本の井戸から始まりました。天然ガスの採掘が難航し、もうあきらめようかと思った最後の1本から、1日1万トン、温度60度という天然温泉が湧き出したんです。そして翌1964年、初任給2万円前後の時代でしたが、約30億円という莫大な投資をし、1日7,000人の集客を目標に事業をスタートさせました。当時は重厚長大産業の全盛期。観光業に世間は目もくれない時代に誇大妄想ではないかと言われながらも、新しい事業を始めた当時の経営陣には、大変な決断力と先見の明があったと思います。大型温泉施設に観光ホテル、さらに遊園地と、開業から1年半後には現在につながる基本設備はできあがっていたわけですから。

内田　ナガシマリゾートの誕生は、創業者の執念が実を結んだのですね。

稲葉　ええ。ただ、開業当初は順調でも、その後お客様がリピートしてくださるかが問題でした。しかし、1978年にスリルライドの先駆けとなるコークスクリューというコースターを入れたところ、若者の人気に火がつき、同時にジャンボ海水プールをオープンさせ、中高年から若者へと一気に客層が広がりました。そして、1988年に開館した「ホテル花水木」によって世間にホテル業として認められ、1998年には「なばなの里」、2002年には、現在、日本一の店舗数を誇るアウトレットモール「ジャズドリーム長島」の営業を開始しました。また、2010年にお子さんに大人気の「名古屋アンパンマンこどもミュージアム&パーク」をオープンさせ、おかげさまで、現在、有料施設だけで年間660～670万人。ナガシマリゾート全体では約1,500万人のお客様がいらっしゃる状況です。

内田淳正 うちだあつまさ
学長　医学博士
専門分野は、整形外科学

自分が社会にどう貢献できるかを考えられる人財*、未来の国の基盤をつくる人財を養成したい

＊「人は財産である」という内田学長の考えから、「人材」ではなく「人財」と表現しています。

内田　たえまない挑戦の50年だったということですね。三重大学も新制三重大学になって60年が過ぎ、今は学生数7,000人を超える大学になりました。教職員を合わせると1万人近くの巨大な組織ですが、その割には自由な風土で、みんなで切磋琢磨しながら成長していく環境は変わらず存在するように感じています。ただ、法人化によって国立大学も変わりました。開かれた大学として、教育・研究を通じた地域貢献が大学の使命となり、産学官の連携を進めるなど、三重大学も少しずつではありますが進化しております。

文化を守りながら観光で地域の活性化を

司会　今年は神宮の式年遷宮と、来年、熊野古道が世界遺産登録10周年を迎えることもあり、多くの観光客が三重県を訪れています。地域と観光のあり方について、ご意見をお聞かせ願えますか。

稲葉　昔から、地域と宗教と観光の結びつきは強く、昨今、富士登山が流行っていますが、もともと信仰からスタートしています。お伊勢参りは、その最たるものでしょう。ただ、熊野古道については、私は通常の観光地とは少し違うと感じています。自然景観も含めた文化遺産を、団体が押し寄せるような観光地にしてしまうと、環境破壊につながったり、独自の生活習慣が失われたりする可能性もあり、注意が必要ではないでしょうか。

内田　おっしゃるように熊野古道の魅力は、人が足を踏み入れにくいアクセスの不便さゆえに地域に残されてきたものです。これが便利になって大量の観光客が訪れたときに、文化の維持が課題になってきます。三重大学では地域戦略センター(※1)を立ち上げ、特に、行政と連携して地域政策を企画しておりますが、文化と観光の両立に関しても、それを実現できる政策提言ができれば、と思っています。大学が地域の観光に対して果たすべき役割については検討が必要ですが、一つの参考になるのが江戸時代のおかげ参り(※2)です。観光の基本は、旅人への心地よいおもてなし。おかげ参りでは伊勢の人だけでなく、沿道の人々もそれぞれが協力して旅がしやすい状況をつくったと言われています。現代でも、そういう状況が生まれるように大学が協力をする。例えば、遷宮でも学生が案内役を担うなどし、観光が教養教育につながっていけば、と思っています。

稲葉　観光業を志望する学生さんは、企画部門に関心を持っている方が多いようですね。ただ、企画立案は体験が生きてこないといけませんので、こういう機会に体験していただくのはいいと思います。観光客の案内役を買って出るにしても、生半可な勉強では務まりませんから、相当な力がつくはずです。

多様化に応える柔軟な体制づくり

司会　近年、少子高齢化やグローバル化によって、企業にも大学にも変化が求められていますが、どのようにお考えですか。

稲葉　私どもの業界では、少子高齢化と同時に多様化という問題にも直面しています。昔は、世代ごとに満足いただけるサービスのパターンがありましたが、今はお客様によって考え方やニーズがさまざまです。よくみなさんから、ナガシマは娯楽のデパートだと言われますが、これは多様化に対応するためにオールラウンドの組織づくりを進めてきた結果です。また、以前の旅は周遊型でしたが、今は一つの場所でゆっくりと寛ぐ長期滞在型のニーズも増えてきました。今まで観光業界は大量消費への対応を考えてきましたが、今後は細分化されたニーズをいかに早くキャッチし、対応していくかが課題です。

内田　大学の場合は、多様性をいかに学内につくりあげていくかが課題です。もともと大学は、学生の入学年齢がほぼ18歳ですから、非常に均質な集団です。そこで、私は社会人や高齢者の方にもう一度大学に入っていただき、自分を見つめ直す機会を提供できないかと考えています。市民公開講座などを行っていますが、さまざまな年齢、経験を持つ人がともに学ぶことで、学生にも教員にも刺激が加わるはず。多様な人を受け入れて認め合う、そんな環境をつくりたいと思っています。

稲葉　なるほど。多様な人の受け入れという点では、国際化に関して日本の観光業界は同様の課題を抱えています。今、

稲葉邦成 いなばくにしげ
長島観光開発株式会社代表取締役社長
三重大学農学部卒業後、同社へ入社。
経理部長、専務取締役などを経て、2006年より現職。

今までのような大量消費ではなく、今後は細分化されたニーズをいかにキャッチするかが課題になる

日本人のお客様と同時に海外のお客様にも楽しんでいただけるかというと、まだまだ壁がある。国民性の違いをのりこえ、ともに納得いただける、良質かつ安価に遊んでいただける本物のレジャーを提供し、課題を解消していかなければなりません。

内田　それには地域の国際化も必要でしょう。三重大学には300人程の留学生がいますが、彼らといかに積極的に交流していくかが大事です。日本人留学生の減少が問題になっていますが、外国からの留学生は増えています。そういう環境をチャンスととらえて、多様な価値観を認め合う社会を大学が先導してつくりたいと思っています。

世界一の環境先進大学を目指す

司会　稲葉社長が学ばれた時代から三重大学も成長し、キャンパスも大きく変わりました。当時を振り返られていかがですか。

稲葉　先ほど学生数が7,000人を超えるとうかがい、驚きました。私がいた頃、農学部の学生は800人程でしたでしょうか。校舎も木造2階建てで、学生も学内の雰囲気も非常に純朴でした。学生は少数ながらも互いに切磋琢磨し合い、先輩後輩の仲が良かった。また、農学部には農場での農作業もあり、とても貴重な経験をさせていただきました。もう当時の面影は残っていませんが、本当に懐かしく良い思い出です。

内田　かつての農学部と農場の跡地に広がる今のキャンパスは、三重大学の財産です。全学部が同じキャンパスに集まっているため、全体の交流がとりやすく、また、農学部時代から成長した巨木が木陰をつくり、目の前には海が広がっています。今、三重大学では環境への取り組みを進めていますが、この自然に恵まれたキャンパスがあるからこそ、「世界一の環境先進大学を目指そう」と大きな目標を掲げることができたわけです。

稲葉　環境対策は企業にとっても大きな課題です。私どもでは省エネの視点から、早い段階で自家発電を導入しました。当初は経済性を考えて重油のボイラーを導入したんですが、その後はCO_2の排出を抑えようと、段階的に天然ガスに切り替えています。また、敷地内外の緑化やLED照明の導入による節電にも努めております。ただ、経済性と環境性が必ずしも合致しないため、環境負荷を抑えながらどう事業を展開していくか、頭を悩ませているところです。

内田　三重大学では、全国の大学で初めて「スマートキャンパス実証事業(※3)」を行っています。創電・蓄電・節電の3つを効率よく運用するマネジメントシステムを検証しており、これが実現できれば規模を拡大して、小学校区程度のコミュニティのモデルに、と考えています。また、環境人財養成のための多様な試みなどが評価され、今年は第22回地球環境大賞で文部科学大臣賞を受賞しました。それがまた、学生、教職員の励みになっていると思います。

稲葉　素晴らしい取り組みですね。私どもも、大学の知恵を学びたいと思います。

困難を乗り越えるバイタリティーを

司会　昨今、若い世代の早期離職が問題となっております。一つの会社に心血を注いでこられた稲葉社長から、三重大学出身の先輩として、後輩へのエールをお願いできますか。

稲葉　振り返ると、仕事は楽しいことより、むしろ苦しいことのほうが多かったように思います。また、自分の理想と仕事の現場とは、大概は違うものです。現実を受け止めて困難を切り抜けていかないと、途中でくじけてしまう。これまで多くの人を見てきましたが、途中で挫折したものの後で成功したという人はほとんどいません。物事はこれと決めたら、初志貫徹することです。

内田　まったくその通りですね。やはり最後までやり抜く気持ちが、どの領域でも大切だと思います。どんなときも、自分の選択が自分にとって一番良かったと思う気持ちを持ち続けることが、何事も継続できる力になるはずです。

稲葉　私の場合は農学部の異端児で、当時、観光業の会社に就職すると言ったら、先生に随分反対されました。それでも入社し、営業職としてすぐ外回りに出たんですね。ところがある日、営業先で老人会の会長さんに、「若い男が客引きなんか、やっておってはいかんぞ」と叱られた。これは大変にショックでした。周りからはそんな風にしか見えないんだと落ちこみましたが、「これが俺の仕事だ」と考え、ずっとやってきました。結局、それがプラスになっていると思います。

内田　辛い思いを乗り越えた先に成功や達成感があるわけですから、学生には立ち向かってほしいですね。また、大学は地域に貢献できる人財養成を目指していますが、そのためには、もっと学生に地域の情報を発信しなければいけないと思っています。地方の企業は中小がほとんど。しかし、小さな集団から大きくなっていく面白さや家族的な良さがあるはずです。その魅力を学生に伝えることが、稲葉社長のように地域に貢献できる人財につながるのではないかと思います。

稲葉　企業側から申しますと、最近の若者に感じますのは、型にはまった完成度とでも申しましょうか、みなさん優秀で、与えられた物事をうまくこなしていくことには長けていますが、困難にぶつかったときに課題がある。自分で工夫して乗り越えていく粘り強さやバイタリティーを、学生時代に養っていただきたいですね。

内田　それは、まさしく三重大学が掲げる生きる力の養成につながるものです。これまで経済成長を目指してきた日本社会の根底には、勤勉な労働者を育てようという意識がありました。それが決まった枠におさまってしまう傾向を生み出していると思うんですね。今後はその意識を変えていく必要があるでしょう。これからは大学が教育を通して、成長の先に何があるのか、自分が社会にどう貢献できるかを考えられる人財、未来の国の基盤をつくる人財を養成したいと思います。

地域に根ざし、発展していくために

司会　では最後に、地域とともにある企業として、今後の展望と三重大学への期待をお聞かせ願えますか。

稲葉　やはり、多様化する社会情勢にどう対応していくか、社会ニーズをくみ取る方法をますます磨いていかなければなりません。加えて、安心・安全を徹底し、海外のお客様を迎え入れるためにも本物志向を追求していきたいですね。さらに、当社は、これまで三重県の一カ所で事業展開をしてきましたが、一局集中がいいのかどうか。また、観光業に専念していますが、果たしてそれだけが地域貢献の道なのか。多様な視点から見つめますと、将来は多方面への進出や事業の多角化が必要になるのではないかと考えております。まだまだ発展途上ですが、この地に根ざしてきた企業として、大学とも協力して三重県のブランド価値向上を目指して、貢献の道を探っていきたいと思います。

内田　こちらこそ、ぜひ連携をお願いしたいと思います。三重大学は地域圏大学です。この地域の中で信頼される大学になるには、もっと地域との関係を密にし、地域の企業で活躍する三重大学出身者を育てなければなりません。そうした人財の輩出が、この地域の発展につながると確信しています。

※3 スマートキャンパス実証事業
経済産業省の「次世代エネルギー技術実証事業」として2011年に採択。再生可能エネルギーを有効に活用しながら、学内のCO_2排出量削減を目指す。得られた成果をもとに、ほかのコミュニティに適用できるモデル作成にも取り組む。